

息子は、脳性麻痺の障害を負っていた。

息子が小学生のとき、私は、毎朝息子に付き添って登校していた。

そして、始業の予鈴チャイムが鳴るまでの間、校庭で、歩行のためのリハビリ訓練をしていた。

一年生から四年生までは、四隅に車輪が付いた歩行器を使い、五年生の二学期までは杖を突いて、それから卒業までは杖も何も持たずに、毎朝、息子は校庭を歩いた……というより歩かされていた。

トレーナー役の私の厳しさは、学校中で知らない者はなく、息子が校庭に落とした汗と涙の数はそれこそ数えきれない。

そんな朝から張り詰めた空気を醸し出している私たちのところへ、同級生の女の子、まほちゃんが、どこからともなく現れる。

まず私に軽く体当たりをしてくて、「ふん！」という感じで、顎をしゃくり、私が肩にかけている息子のランドセルを寄せと、言葉にせず言う。

照れて言えないのだ。

「いつも、ありがとう」と言いながら、私がランドセルを渡すと、小さな肩にふたつのランドセルを背負い、昇降口へ向かって、ずんずん歩いていく。

それが六年間続いた。

小学校を卒業してからも、その後ろ姿を思い出すたびに、まほちゃんの優しい、親切な心が、私の心を温かく満たしてくれる。